

# 農業土木を 支えてきた人々

## 胆沢地方における「カンガイ」の偉大な先人後藤寿庵

佐藤 政 基\*

胆沢の地名は、平安朝が本格的に北方経営に取り組み、田村麻呂将軍に胆沢城を構築させたことによって、日本史にも登場するので大方はすでにご存知と思うが、あらためて紹介すると、古来から現在まで通称胆沢と呼んでいるのは、水沢市を中心とする岩手県胆沢郡の一円を示すものである。

往時中央集権の支配拠点となった胆沢城跡は、現在水沢市佐倉河字八幡地内に確認されており、国の重要史跡として保存されている。当時中央集権の最前線支庁が何もない荒野に構築されたわけではなく、当時においても城跡付近一帯には多くの人々が生活を営んでおり、そしてかなり広く農耕が営まれ蝦夷地としては最も開けた地域であったろうと考えられている。

現在は、人口53,800人を擁する水沢市街地を中心に四囲は純農村で、岩手県における一大穀倉地帯となっている。

そして、受益面積約9,600 ha、組合員数約8,160人を擁する全国屈指の大改良区である胆沢平野土地改良区が、本題に関係のある寿庵堰を含めたすべての「カンガイ」施設および、水管理の一切を所掌している。

その寿庵堰は開削後いくたびかの改修が重ねられて、今日まで引継がれてきているが、この一大穀倉地帯のうち8,600haは、胆沢川を水源とする寿庵堰によって主として「カンガイ」され、一部茂井羅堰によって補水されている。一説によるとセキは茂井羅堰・寿庵堰・三堰の順に開削され、胆沢の耕地はこの三つのセキの拡張によって開拓されてきたといえる。現在三つのセキは若干姿を変えていて、寿庵堰は戦後築造された石洸ダムから導水し、茂井羅堰・三堰は統合して茂井羅堰として補水水源として維持されているが、旧セキ関係を 図-1 に示す。

さて本題の後藤寿庵についてであるが、本誌の標題「農業土木を支えてきた人々」には該当しないのかも知れない。それは今から約370年前の徳川時代初期の元和

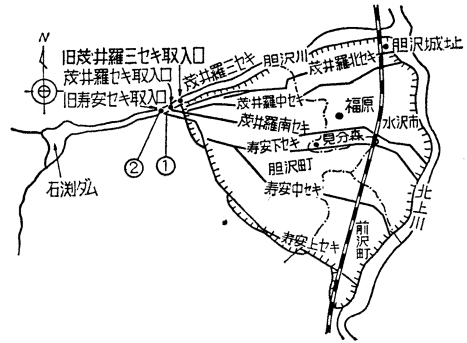


図-1 胆沢地方における新・旧セキ所在

年代に新セキ開削に着手した開拓の先駆者であったということ、その徳を偲びセキにその名をつけて今日まで伝えていっているとはいうものの、セキ開削に関する史料がほとんど残されていないからである。

ではなぜこの欄で紹介するかといえば、セキ開削に関する史料こそ残されていないものの、その実在を示す重要な史料を残していることと、出生も定かでない、また死亡の時期および場所もまったく不明な、まさに数奇な運命をたどった人物なのであるが、現在水沢市福原に、すなわち後藤寿庵が伊達政宗に知遇を得て1,200石を以って封ぜられ居住した地に廟堂としてまつられ、胆沢開拓の偉大な恩人として地域の人々に、昔に変わらぬ深い敬信を受けていることからである。

それでは後藤寿庵の生涯および事績について定説をまじえて紹介することとする。

まずもって寿庵は前記のように、胆沢地方においては伝承によって広く知られているし、生前にあっては伊達藩では広く知れわたっていたようである。明治維新後、岩手県が設置されてからは県下一般にも知られるようになったが、全国的にその名が知られるようになったのは、昭和30年前後だったようである。

そのように後藤寿庵の名が著名になった顕著な理由

\* 岩手県農政部農地整備課 (さとう せいき)

は、一つには近世初頭東北地方にあってキリスト教の布教に尽力していたが、徳川幕府のキリスト教弾圧が強まるにしたがって、遂に自らも迫害を受ける身となって封地から逃亡せざるをえなくなった薄幸の先駆者であったことと、もう一つは寿庵堰開削の功労者であったという二つの理由からである。

さて、寿庵の出生については前にも述べたように史料がなく定説はないようなので、通説にしたがってみると、豊臣秀吉の全国統一の際、陸前・陸中国にわたって大きな勢力をもっていた、奥羽の地頭総支配葛西氏が、秀吉の出生や力量を軽んじて命令にしたがわず、その膝下に逸早く参じなかったことから、叛意ありとして秀吉軍の討伐を受ける。そのとき伊達政宗は葛西領の南部を領し境を接していたが、天下の大勢をす早く見抜き秀吉に参じ、葛西とは運命を異にすることになる。そのうえ政宗は策を用い、葛西を秀吉にとりなすとし、秀吉の安堵状を伝えることを理由に葛西の部将をことごとく集め、部下兵と引き離しておいて、そのほとんどを騙し討ちに打ち取ったとされている。その折、政宗の右腕として辣腕を振ったのが、泉田安芸守である。このことで政宗が葛西平定に功があったとして秀吉から旧葛西領を拝領する。政宗はこのとき胆沢を手中にすることになる。なお政宗は泉田安芸を旧葛西領の中心付近の現岩手県東磐井郡川崎村薄衣字泉館地内に泉館を構えさせ、旧葛西領に腕をきかした。葛西氏の滅亡は時に天正10年で現東磐井郡藤沢町の藤沢城主であった岩瀧家も主家と運命をともにした。

ときに、泉田安芸の構えた泉館と藤沢城は徒歩1時間余の近距離であったことから、岩瀧一族は蠢動だにできず四散した。

寿庵は、葛西氏と運命をともにした岩瀧家の三男として生をうけたとされている。幼名を又五郎といった。しかし前記のように岩瀧家も四散せざるを得なかったため、寿庵も逃れて諸所に流浪し、その後長崎に赴いて、この地において耶蘇を知り運命のおもむくところ信者になった。その後五島に渡り、その地では五島を姓とした。岩瀧家四散以来そのときまで約20年の歳月が流れているが、慶長16年メキシコから帰朝した田中勝助と知るようになり、勝助から支倉常長を経て伊達政宗に推挙されたとされている。

主家葛西家・生家岩瀧家にとって怨敵政宗に仕え知遇を受け、そしてまた迫害を受け再び逃亡し流浪するとは、なんたる悲劇であろう。まさに運命のいたづらなのであろうか。

さて、支倉常長によって寿庵は政宗に推挙されるので

あるが、前記のような事情があったので寿庵はその出生なり経歴は一切明らかにしなかったのではないか。したがって政宗に仕えるにあたって、家格上の都合から名義的に政宗の重臣後藤信康の義弟となり、後藤寿庵と改名し、召されて現在の水沢市福原の地に1,200石を以って封ぜられた。以上が通説となっている寿庵の前半生である。

流浪の境涯から一躍1,200石の封土を与えられたものの、一旦四散した岩瀧家であってみれば従臣がなく、ともかく手をつくし各地に分散していた一族旧臣を招き集め、福原の地に屋敷割をし、福原小路と称して居住した。今日でも福原に岩瀧姓が多いのは、そのためであるといわれている。

政宗の家臣となった寿庵は慶長19年には大阪冬の陣に鉄砲60丁隊の隊長として出陣しているし、翌元和元年の夏の陣には再び鉄砲100丁隊の隊長として参陣しているが、24年前の天正18年、秀吉によって滅亡させられた主家葛西家・生家岩瀧家にとって大阪の陣は、あたかも弔い合戦のようなものなのだが、キリスト教の信者となった寿庵には政宗の命に従っただけで、復讐の心はなかったのではなからうか。

寿庵が福原に居住するようになった年代は史料がなく、これまた明確にされていない。大阪冬の陣に出陣した1年か2年前ぐらいだろうと推測されている。そしてキリスト教教ゆえに迫害を受け福原から逃亡したのは元和9年末であったとされているから、寿庵の福原在住は12,3年ということになるが、比較的短いこの12,3年間は福原の地は東北キリストンのメッカとなったであろう。したがって信徒も多く、教会堂が営まれ、そして外国神父も来たであろうから、キリストン寿庵にとっては生涯のうちで最も心が安らぎ、そして恵まれた幸福な期間であったし、また福原の住民にとっても、胆沢地方の人々にとっても最も多幸で、生活に張り合いを感じた一時期でもあった。それは、寿庵の情愛厚い仁政と、直接生活につながる寿庵堰開削の一大事業があったからである。

この間における寿庵の事績を証明する史料として、明治32年ローマのバルベリー図書館で発見された古文書によって明らかにされたのであるが、それはローマ教皇による罪障全赦の行事である大赦に関するものである。元来大赦は100年ごとに一回行われるもので、後に50年に一回と改められ、また教会において特殊の大祭が行われた際にも行うこともあったとされている。たまたま当時長年月にわたって建造中であったサン・ペトロ寺院が落成したので、ローマ教皇パウロ五世が元和3年に全世界の信徒に罪障全赦の教書を下した。この教書は3年の歳



写真-1 旧寿安堰取入口



写真-2 国営造成による現寿安堰

月を経て元和6年にわが国信徒に伝えられたが、奥羽にはミラノ生れのジュアン・パプチスタ・ボルロ神父がもたらしたとされている。教書に対する奉答文、すなわち古文書であるが、内容は奥州各藩のキリシタンの隆盛、あるいはそれに対する迫害の状況、および神父の活動等を伝えているもので日付が元和7年8月14日となっているので、教書が寿庵の手に届くまで約4年を経過している。末記署名者は17名で、その筆頭者となっているのが後藤寿庵であることから、当時における寿庵のキリシタン信徒としての地位およびその活躍のさまが偲ばれるのである。

しかし寿庵が奉答文に署名した元和7年ごろは伊達藩においても信教に対する迫害が逐次強化された時代でもあったので、寿庵にとっては不安の時期でもあったのではなからうか。

このような世情は、キリシタン信徒にとってまことに不穏な時代ではあったが、政宗はキリシタンの父であり、信仰の柱石でもある寿庵に好意をもっていたので露骨な抑圧は加えなかった。むしろくに寿庵に対しては、あるときは寛大な条件を示して布教を思いとどまるように説得し、またあるときは寿庵の友人である石母田大膳宗頼を介して転宗を婉曲にすすめさせたが、政宗の温情をもってしても、また石母田の友情をもっても寿庵の信仰を変えさせることができなかった。そして石母田の最後の懇諭をしりぞけたのは元和9年の末であった。

ついに伊達藩も幕府に対する恭順の意味からも寿庵に対して討手をさしむけることになるが、政宗は寿庵を惜しみ事前に情報を洩らし逃亡を助けたとされている。

寿庵ほどの人物であるので本来ならば居住地福原で自刃したであろうが、自殺を罪業とするキリシタン信徒であれば切腹は信仰上許されないの、福原に後ろ髪を引

かれる思いで逃亡したのではなかつたらうか。

なお、逃亡先については秋田領といわれたこともあったが、今日では南部領であったということになっている。逃亡後の消息は一切わかっていない。したがって寿庵の最後もまた不明である。

ただ、現岩手県岩手郡松尾村に、すなわち旧南部領であるが、後藤堰と呼ばれるセキが現存するが、同地には後藤にちなむ地名または姓が一つもないことから、寿庵はこの地において後藤堰の開削に何なりと関与したのではなかつたかと、当地の古老にささやかれているが、史料がなく定かでない。

さて土地改良に関係のない話が長くなってしまったが、寿庵堰はどのような経緯によって開削されたのであろうか、史料がなく伝承によるものであるが要約してみる。

元和元年の末、津軽の信徒が凶作に苦しんでいるのを救済するために耶蘇会神父ジェロニモ・デ・アンジェリスが東北に旅行した途次、寿庵の居住する福原の西に位置する見分(検地に使われた展望台地と伝えられる)にきて一面の田畑の作物が枯死し荒涼とした情景に出会い、その情景のすさまじさに驚いてまったくの沙漠のようだといって、寿庵にセキの開削を示唆したという。史料がなく真偽は確かめられないが、この所伝をもとに開削時を推測すると寿庵堰開削着工は元和3年ごろになる。一方ではセキ開削をうながす時代の背景もあったのである。

政宗の大規模な開拓政策がその背景である。政宗は元和4年4月、磐井と胆沢地を巡視したが、4月22日付の地方役人あての回状によると、政宗巡視の際に農民は、その訴えや希望を忌憚なく上申し、また役人は荒地を十分調査し、川やセキの地図を作成して開拓計画を提示するよう指示しているの、今日では寿庵堰開削着工は元

和4年以降との説が定説となっている。いずれにしてもわずか1年か2年の差である。

寿庵堰のような、当時あっては築城にも匹敵する大事業で、しかも至難な工事が寿庵の至誠と農民に対する信仰の至純にまで高められた愛情とによって発意されたとしても、藩主政宗の開拓施策という時代の大きな背景があってこそ、はじめて可能であったのではなからうか。

伝承によると、この工事は幾度となく洪水やその他の障害にあって破壊され、失敗に終わったこともあったが、その時寿庵は、かつて外国宣教師たちに学んだ方法で大きな石材を使用し、新式の機械を用いて堅牢な石垣を築いたと伝えられる。

さて、明治初期までの水利慣行として伝えられるところによると、寿庵堰は胆沢川からの直接自然取入れであったようである。寿庵堰はなぜ自然取入れであったのであろうか。それは胆沢川の当該取水地点がセキ開削時取水に最も適した地点であったとしても、開削後洪水被害によって何度となく導流堤を川岸に沿って上流に延ばしているのをみると必ずしもうなづけない。

たとえ急流であってせき留めることが容易でなかったにしても、決壊するたびに導流堤を幾度となく構築した苦難を思うと、川床への巨石の捨石による川床の底上げぐらいは考えられたのではなかったか。それなのにせき留めることをあえてしなかったのは下流既設の茂井羅堰の取水に影響があることから、茂井羅堰との間に協定があって、川床のせき留めは行われなかったものと推測される。

したがって、川床の低下によって取水ができなくなると、導流堤を設けたものと推測されるが、川積への導流堤の設置自体川幅を狭め、そしてまた川床を低下させて、導流堤をさらに延ばすパターンが幾度となく繰返されていることを示している。

また、取水制御技術が発達していなかった時代のことでもあったので、洪水時には水路にも乱流し、そしてハンランし水路を破壊し、これまた幾度となく被害を与えたものと推測される。

まえに寿庵は巨石をもって堅牢な石垣を築いたと伝えられることを記したが、現在それを実証するような築造物はほとんど残っていないが、ただ写真-1は往時のセキの原形をとどめるものとして、寿庵堰の遺跡として胆沢平野土地改良区によって、毎年雑草を取り除くなどして大切に保存されている。

いま旧セキとして保存されているものから旧セキの構造をみると、水路護岸は胆沢川に多量に産する玉石が使用されている。いわゆる玉石野ヅラ積で、ごく近年まで

どこでも見られる構造である。したがって、巨石が使用されたと伝えられるのは、川積に構造した水衝部の導流堤の築造に当たることと想像されるのであるが、今は付近に巨石が転在するのみで、古を偲ばすにすぎない。

セキの開削工事が元和4年に着工されたとしても、数度の災害に見舞われ失敗を重ねたと伝えられているし、2、3年後には切支丹迫害が日に日に強くなり、寿庵自身が一部家臣と逃亡していることから、おそらく寿庵はこの大工事の完成を見なかったのではなからうか。一説によると寿庵の逃亡により工事は中断されたものの、この大工事は後に同地方古城村の干田左馬および前沢の遠藤大学に引継がれて遂に完成したとされている。以上が寿庵の後半生である。

かくて後藤寿庵の事績は370年にわたって胆沢地方の人々の生活を確保してきているのであって、胆沢地方の人たちが偉大な開拓者として、また恩人として現在でも賛仰しているのもむべなることである。

最後に昭和6年、当時寿庵堰を管理していた寿庵堰水利組合が、寿庵の功績を長く後世に伝えるため、かつての寿庵の居住跡に記念碑を建立したが、寿庵の功績が大正政府にも認められたことも含めて、簡明に要約されているので、碑文を紹介してこの稿をおくことにする。

#### 後藤寿庵碑文

後藤寿庵ハ伊達政宗ノ臣ナリ、三分ノ地一千二百石ヲ領シテ此ノ地ニ館セリ、常ニ仁慈ヲ以テ其ノ民ニ臨ミ、其ノ窮乏ヲ見テハ私財ヲ抛チ、更ニ他ニ債シテ之ヲ賑給セリ、元和ノ初年巨溝ヲ穿チテ胆沢川ノ水ヲ引キ曠野ヲ開拓センコトヲ企テ、苦慮百端遂ニ之ヲ大成セリ、爾來胆沢郡南ノ地稲田夥シク開ク、且旱天ト雖更ニ灌水ノ乏シキコトヲ患ヘス、大正十三年朝廷追賞シテ従五位ヲ賜ス。寿庵又深ク基督教ニ帰シ、居地福原ニ教会堂ヲ設ケ、外国宣教師ヲ招キテ福音ノ宣教ニ努ム、嘗羅馬法王ぼうろ五世ノ下セル罪障全赦ノ教書ニ對シ、奥羽ノ信徒ヲ代表シテ奉答文ヲ呈セルコトアリ、元和ノ末年幕府敕命ヲ下シテ西教ノ禁絶ヲ図ルヤ伊達政宗百方心ヲ碎キテ寿庵ニ転宗ヲ勸ム、聴カス、封ヲ棄テ南部ニ去リ信徒ノ晩節ヲ全ウセリ。

今茲寿庵堰水利組合併ニ地方ノ有志相諮リ其徳ヲ石ニ勒シテ後昆ニ伝エントス囑ニ從ヒ來由ヲ叙スルコト再リ。

昭和六年九月

菅野 義之助識

#### 引用文献

- 1) 板橋 源：後藤寿庵 (1960)

[1980, 3, 24, 受稿]